

英語教育における英語学[†]浅野 一郎*
宇都宮大学教育学部*

英語教育の場で役に立つ新しい英語学・言語学の知識は何かを検討する。今回は、統語的振る舞いに関する意味の側面に焦点を当てる。構文交替の可否を決めるのはどのような意味的要素か、事象の時間軸による分類と統語的振る舞いの関係について、より深い英文理解や運用に役立つと思われる点に焦点を当て検討する。

キーワード：学校文法(school grammar), 二重目的語構文(double object construction), 概念構造(conceptual structures), 構文交替(diathesis alternations), 語彙的アスペクト(aktionsart), 事象構造(event structure)

0. はじめに

浅野(2011)では、意味を統語構造から読み取るだけでなく、概念構造という心的表示レベルを設けることの必要性を考察し、Jackendoff(1983, 1990)の概念形成規則を紹介した。そこではさらに、いくつかの構文交替の可能性に関して、動詞の意味的性質による制約があることを紹介した。

本稿では、さらなる意味的制約の例として、中学の英語教科書にも必ず取り上げられる、二重目的語構文の問題を取り上げ、それに関する意味的制約を検討する。

次に、完了、未完了といった語彙的アスペクト(aktionsart)による事象の分類と、それぞれの類の特徴について、統語的振る舞いの違いをもたらす点に焦点を当てて検討する。

1. 構文交替について

1.1 二重目的語構文の構文交替について

次の(1a)には(1b)のような交替形が存在することは学校文法でもおなじみである。

- (1) a. John gave a book to Mary.
b. John gave Mary a book.

文部科学省『中学校学習指導要領解説—外国語編』は、教えるべき文構造「主語+動詞+間接目

的語+名詞」の例として(2)、および「主語+動詞+間接目的語+代名詞」の例として(3)を挙げている。

- (2) The teacher told us an interesting story.
He showed me his new bike.
She gave me her e-mail address.
(3) I will show her that.
I can teach him that.
I won't tell them this.

さらに上記『解説』は、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること」とも述べている。give, showなどは「主語+動詞+名詞」の文構造の例としては挙げられていないが、その文構造にも出現することを教えることは望ましいであろう。

例えば平成16年版の中学英語教科書 *Sunshine English Course 2* の53ページの本文には、*I'll give it to you.*という文があり、続くページの説明欄には、*I'll give her a birthday card.*や *I gave him a pen.*の文を載せる、¹⁾という工夫がされているのはそのいい例である。

参考書などは、文の書きかえ「第4文型[S+V+O+O]→第3文型[S+V+O+to for ~]」として、練習問題を載せるものもある。

また、buy, make, cookなどの動詞の第4文型の意味を第3文型を使って言おうとすると、to-間接

[†] Ichiro ASANO*: English Linguistics in English Language Teaching 7

* Faculty of Education, Utsunomiya University

目的語の代わりに *for*-間接目的語を伴うことは、中学で教える必要があるだろう。

「関連のある文法事項はまとまりをもって整理する」のは望ましいことだが、書き換えが機械的に成立するような印象を与えるのはよくない。この構文交替は難しい（あるいは、おもしろい）問題を含んでおり、英語学の分野では多くの研究がなされている。

英語学の論考を見る前に、次の a, b 文を見てみよう。

(4) a. Open me a beer.

b. *Open me the door.²⁾

白井恭弘氏の著書³⁾ からとった例であるが、b 文がおかしいことは母語話者なら問題なく判断できると氏は言う。氏自身も (4b) がおかしいことに関して、説明を聞く前から直感があつたので、この種の直感は、母語話者でなくても多くの英語に接すれば生じる可能性があると言う。しかし、外国語として英語を学ぶ多くの日本人にとっては、語学的説明をされるまではわからないのではないだろうか。

(4b) がおかしいのは、二重目的語構文では「間接目的語が直接目的語を（何らかの意味で）所有することになる」という意味が生じるためである。自分のために開けられたビールは“所有”できる、つまり飲めるが、ドアはいかなる意味でも“所有”できないからである。

この構文交替 (diathesis⁴⁾ alternation) は、英語学の分野では与格交替 (dative alternation) と呼ばれる。与格交替の可否については、Green (1974) が多くの観察をしており、それらは荒木 (編) 『英語正誤辞典』に取り上げられているので参照することができる。

一例として (5) を挙げる。

(5) a. The American ambassador baked a cake for James I.

b. *The American ambassador baked James I a cake.⁵⁾

(Green (1974) p.107)

「主語、間接目的語、直接目的語で表されているものが、動詞で言及されている時点において同時に存在していなければならない」という制約があるという。

この制約（少なくともその主要な部分）は、(4b) を非文法的とする制約「二重目的語構文では、

間接目的語が直接目的語を（何らかの意味で）所有することになる」という制約に還元できるだろう。

Pinker (1989) は、「与格交替をはじめ構文交替の可否は、述語の持つ語彙概念構造の、項構造と結びつく主題役割的核部分 (thematic core)⁶⁾ の交替可能性に左右される」という意味の仮説を立てている。Pinker の仮説の述べ方、用語等は少し違うが、交替に関する制約としては、上記のように解釈し直して問題はなからう。

すなわち、「他動詞+目的語+to 目的語」構文は概念構造の核に (6) が、二重目的語構文の概念構造には (7) があるとする。⁷⁾

(6) X causes Y to go to Z.

(7) X causes Y to have Z.

(4b), (5b) の不適格性は、二重目的語構文の間接目的語は直接目的語の移動の着点 (goal) であるのみならず、その所有者 (possessor) となり得るものでなければならないことに起因する。

(8), (9) は国境やシカゴなどの場所への物の移動は二重目的語構文で表せないことの例であり、(10) は二重目的語構文の間接目的語が受益者であるのみならず所有者の読みを持たねばならないことを示している。⁸⁾

(8) John sent a package to the border /boarder.

John sent the boarder / *border a package.

(9) Rebecca drove her car to Chicago.

*Rebecca drove Chicago her car.

(10) Bob made/got/stirred/tasted the cake for Phil.

Bob made/got/*stirred/*tasted Phil the cake .

1.2 所格交替 (locative alternation) について

概念構造の核部分が構文交替の可否を決めるもう一つの例として、所格交替 (locative alternation) (あるいは代表的動詞に因んで *spray/load alternation* と呼ばれる) を見てみよう。

次の b 例のように、物の移動の着点を動詞の目的語として表す可否についての問題である。⁹⁾

(11) a. Irv loaded hay into the wagon.

b. Irv loaded the wagon with hay.

(12) a. Irv spray water onto the flowers.

b. Irv spray the flowers with water.

(13) a. Irv threw the cat into the room.

b. *Irv threw the room with the cat.

(14) a. Irv pushed the car onto the road.

b. *Irv pushed the road with the car.

a 例と b 例は完全に同義ではない。着点が目的語の場合、着点が移動した物によって完全に満たされたりカバーされるなどの変化を受けていなければならない。猫を部屋に放り込んだからといって部屋が変化を受けたとは言えない。車を道路に押し出したからといって道が変化を受けたとは感じられない。

(13b), (14b)の不適合性は、着点が目的語となるためには、概念構造に(15)のような核部分を持たなければいけない、ということで説明できる。

(15) X causes Y to go into a state by causing Z to go to Y.

1.3 構文交替と概念構造

Pinker(1989)自身は、構文交替を、「ある動詞がある構文に現れる(項構造を持つ)場合、他の構文にも現れる(項構造を持つ)ことを許す」ことを規定する(16)の語彙規則として捉えている。この語彙規則は、子供がある動詞、例えば *send* が(16)の→の左辺の構文で現れるのを聞いた場合、右辺の構文でも使えることを学ぶことを意味する。

(16) $NP_1_NP_2\ to_NP_3 \rightarrow NP_1_NP_3\ NP_2$

その条件として、(6)のような概念構造の核部分が(7)のようになる必要がある、とするのである。

しかし、習得の順序を考える場合でなければ、語彙規則の方向性は必ずしも必要ないように思われる。その根拠として、二重目的語構文でしか表せない次のような例があることが挙げられよう。¹⁰⁾

(17)a. *Mary gave the measles to John.

b. Mary gave John the measles.

(18)a. *Mary gave a bath/ a kiss John.

b. Mary gave John a bath/ a kiss.

(19)a. *Mary gave a lift in her BMW to John.

b. Mary gave John a lift in her BMW.

ただし、それにもかかわらず、直接目的語が代名詞の場合は、*to*-前置詞句を使わねばならないという制約がある。

(20) Mary gave John trench mouth, and gave it to Ted.

所格交替に関しても、一方の構文にしか現れない動詞がある。*fill*, *cover* は(21b), (22b)のような「目的語+着点」構文を許さない。¹¹⁾ これは、これらの動詞が目的語の変化の結果状態に焦点を当てる動詞であるからと説明できる。

(21)a. I filled the glass with water.

b. *I filled water into the glass.

(22)a. She covered the bed with a sheet.

b. *She covered a sheet over the bed.

反対に、*pour* は目的語の移動に焦点を当てるので、*into/onto* 構文にしか現れない。

(23)a. I poured water into the glass.

b. *I poured the glass with water.

Pinker は、ある概念構造の核部分を持つ動詞が他の概念構造を表す動詞としても使われることが、動詞の意味から予測される場合があるという。

(6)の概念構造の核を持つ、物の移動や変化を規定する動詞は、通常その移動や変化の様態や、移動や変化を受ける物の性質も規定している。例えば、*spill* や *inject* や *ladle* (ひしゃくで汲む) は行為者による物の移動の始め方を規定しているし、*pour* は連続した流れによる移動を、*spray* は霧状の移動をそれぞれ規定している。

一方、(15)の概念構造の核を持つ動詞も、変化の様態や性質、あるいは変化する物の性質を規定することができる。例えば、*fill a glass with water* では、グラスが水で満杯になることが規定される。*adorn*, *blanket* (毛布でくるむ), *infect* など、物に何かを加えた後の物の状態を規定している。

そこで(12)のように構文交替が可能な動詞 *spray* を見てみると、その移動様態の規定(霧状に移動する)から、移動した物の着点の結果状態(霧状の物はまんべんなく付着する)が予測可能であると言う。この予測可能性が、構文交替という *gestalt shift* を可能にすると Pinker は主張する。¹²⁾

二重目的語構文を可能とする条件として、「(7)のような概念構造の核部分を持つこと、すなわち間接目的語が移動した物を‘所有する’と言う読みが可能であること」があると述べたが、この条件は二重目的語構文のための必要条件であって十分条件ではない。

(24)a. John gave/donated/presented a painting to the museum.

b. John gave/*donated/*presented the museum a painting.

(25)a. Bill told/reported/explained the story to them.

b. Bill told/*reported/*explained them the story.

give と *donate*, *present*, あるいは *tell* と *report*, *explain* の間に‘所有する’と言う読みに関して違

いがあるとは考えられないが、二重目的語構文の可能性には違いがある。

傾向としては、ラテン語語源の動詞（英語語源の動詞に比べ多音節である）は二重目的語構文をとらないといえるが、この一般化にも以下の例は可能であるという例外がある。¹³⁾

(26) He bequeathed them his fortune.

He reserved him a seat.

I telegraphed them the news.

Pinker は構文交替の可否は、動詞の狭い意味類によって決まるという仮説を立てる。‘所有する’という意味を持つことはできるが、必ずしも持たなくてもよい動詞類の中で、ある種の意味を持った狭い類が、二重目的語構文に現れるようになると仮定する。そのような意味類のメンバーは、二重目的語構文に現れる十分条件を満たすことになる。

一例として (27) を見てみよう。

(27) a. Lafleur throws/tosses/flips/kicks/pokes/flings/blasts him the puck; he sgoots, he scores!

b. *I carried/pulled/schlepped/lifted/lowered/hailed John the box.

(27a) の動詞は、行為者が物に瞬間的に力を加え、その結果、物がある軌道を移動するという共通する意味を含んでいる。一方、(27b) の動詞は、行為者が物に継続的に力を加え、その結果、物が移動するという共通意味を含む。前者は二重目的語構文を許し、後者は許さない。^{14) 15)}

2. 語彙的アスペクトと事象の分類

この章は用語の説明から始める必要があろう。

学校文法でも完了相、進行相などのように（あるいは用語は、完了形、進行形であるかもしれないが）、相 (aspect) という概念が出てくる。

時制 (tense) が事象を時間軸の中に位置づける、（指示代名詞のような）直示的 (deictic) 範疇であるのに対して、相は事象の時間的・内部的構成に関する概念である。事象がある時点で完了している場合を英語では動詞の完了相で表し、未完了の場合を進行相で表す。

相 (aspect) の概念は、このように文法的に表される場合に限らず、動詞自体の性質にも関係する。例えば、*jump* という動詞は（心理的には）瞬間的な時間的持続性のない行為を示す。（繰り返しは可能であり、その場合は時間的持続性が生じる。）一方

run が示す行為は時間的持続性がある。このような語彙化された相の概念を、文法化された相と区別して語彙的アスペクト (aktionsart [aktsiõ'nsa:rt])（ドイツ語で *kinds of action* の意味）と呼ぶことがある。

語彙的アスペクトによる事象の分類には、有名な Vendler (1967) の英語動詞の 4 分類がある。

(28) ¹⁶⁾

a. 状態 (states): know, believe, have, desire, love

b. 到達 (achievements): recognize, spot, find, lose, reach, die

c. 活動 (activities): run, walk, swim, push a cart, drive a car

d. 達成 (accomplishments): paint a picture, run ten miles, push a cart to the supermarket, recover from illness

例を見れば分かるように、動詞の分類というのは正確ではなく、動詞が表す事象の分類である。動詞 *run* は単独では「活動」を表すが *run ten miles* となれば「達成」の事象を表す。¹⁷⁾

Vendler (1967) が言語学者にとってなじみやすく、学校文法にとっても有益なのは、分類に当たって統語的証拠を示していることにある。

① 進行形をとらないことで、「状態」が他の 3 つと区別される。

② 「到達」が進行形をとる場合は、進行相ではなく近い未来や予定を表す表現となる。

③ 「活動」と「達成」は、修飾可能な時間の付加詞の種類で区別できる。「活動」は *for*-句で修飾でき、「達成」、「到達」は *in*-句で修飾される。

(29) a. He ran for an hour. 「活動」

b. ?*He ran ten miles for an hour. 「達成」

c. *She reached the station for an hour. 「到達」

(30) a. ?*He ran in an hour. 「活動」

b. He ran ten miles in an hour. 「達成」

c. She reached the station in an hour. 「到達」

影山 (1996) には、Vendler と Dowty (1979) の示すこのような基準が表にまとめてある。また金田一 (1950) の日本語動詞のアスペクトの分類との比較もあり、日英語の対比の点でも参考になる。

3. あとがき（生成語彙意味論について）

浅野 (2011) および本稿では、意味を統語構造からのみ読み取るのではなく、概念構造という心的表

示レベルを設けることの必要性を考察し、また概念構造がどのように構文交替という統語的振る舞いに影響するかを考察した。本稿ではそのほか、事象のアスペクト的構成と統語的振る舞いの関係を考察した。

最近の研究に、Jackendoff のような語彙概念構造の分析、事象参与者間の因果連鎖の分析、事象の語彙的アスペクトの分析、さらに語の持つ「構造化された背景知識(=フレーム)」まで組み込んで、文の意味が語の結合によっていかに創造されるかを説明しようとする Pustejovsky(1995)、小野(2005)等の生成語彙意味論の研究がある。

*He began the book*を*He began reading the book*の意味と解釈できるのは、本は読むために存在するという背景知識がわれわれにあるからであるが、生成語彙意味論は、そういう情報を単語 *book* の辞書記載に組み込む。

生成語彙意味論は、小野(2005)によれば、コンピュータ言語学や自然言語処理の分野でよく知られた理論だそうだが、実行可能性が条件のコンピュータ言語や自然言語処理においては単語の辞書記載にそのような情報が必要なことは理解できる。

小野(2005) p.12 は、生成語彙意味論では、“私たちが経験世界から得るような「一般的な知識」と「言語的知識」には、それほど明確な境界はないと考えるのである。この点で、文法に關与するサブシステム (Grammatically Relevant Subsystem Hypothesis)としてのレキシコンを標榜する立場 (Pinker 1989 など)とははっきり対立する。”と述べている。

浅野(2011)や本稿で取り上げた構文交替に關与するような意味概念が、経験世界から得るような「一般的な知識」と区別されるべき「言語的知識」であるのか否かは、筆者にとって大いに興味がある点で、今後の検討課題としたい。

注

¹⁾ *I'll give it to you.* に対して *I'll give you it.* はあまり使われないという事実がある。古い情報を表す軽い人称代名詞を意図的に文末に置くのはよくないという説明が成り立つかもしれない。(3)の例が可能なのは、焦点となる指示代名詞だからである。

²⁾ “おかしさ”を意味的なものとするか、非文法的

とするべきか検討を要するが、ここでは非文法的とし、* 記号をつけた。

³⁾ 白井(2004) p. 101 より

⁴⁾ “diathesis”の意味は、浅野(2011)注¹²⁾を参照。

⁵⁾ この文のおかしさは、アメリカの大使が歴史に登場するのは James I が死んでずっと後のことであるという知識があって初めて感じることであるので、むしろ意味的逸脱といえるが、非文法性を表す*を付与することで統一した。

⁶⁾ “項構造”については浅野(2006)参照。そこでは主題役割の代わりに意味役割という表現を使っている。

⁷⁾ Pinker(1989)p.73 より。Pinker は概念構造として Jackendoff の概念構造を基本とするが、ここでの表記は簡略化した表記である。

⁸⁾ (8)-(10)は Pinker(1989)p.48 より。

⁹⁾ (11)-(14)は Pinker(1989)p.49 より。

¹⁰⁾ 荒木(編)(1986)pp.329ff. (Originally in Green (1974))

¹¹⁾ Pinker(1989)p.66 より。

¹²⁾ Pinker(1989)pp.77ff.

¹³⁾ Pinker(1989)pp.45ff.

¹⁴⁾ Pinker(1989)pp.110-111.

¹⁵⁾ 二重目的語構文の容認可能性には個人差もあるようだ。Levin(1993) p.47 は、Gropen et al. (1989)は(27b)のように、*carry* 類は二重目的語構文をとらないと分類するが、Green(1974)はこの類の動詞の二重目的語構文に出現する例を多く引用していることを指摘している。

¹⁶⁾ 例は影山(1996)を参考にした。

¹⁷⁾ 「活動」と「達成」には次のような論理的違いがある。「活動」の場合、*He is running* は *He ran*. を含意する。「達成」の場合、*He is painting a picture*. は *He painted a picture*. を含意しない。

「活動」はいわば、細切れにしても性質の変わらない物質名詞に似ている。羊羹の一部を切り取った物が羊羹であるように、'running' の一部分はやはり 'running' である。一方、「達成」は机、犬、車などの普通名詞に似ている。机の部分は机ではない。同様に 'painting a picture' の途中の局面は picture が完成した最終局面とは異質のものである。

参考文献

- 荒木一雄(編). 1986. 『英語正誤辞典』. 研究社.
- 浅野一郎. 2006. 「英語教育における英語学1」.
『教育実践総合センター紀要』第29号, pp.
487-492. 宇都宮大学教育学部教育実践総合セ
ンター.
- 浅野一郎. 2011. 「英語教育における英語学6」.
『教育実践総合センター紀要』第34号, pp.
263-268. 宇都宮大学教育学部教育実践総合セ
ンター.
- Dowty, David. 1979. *Word Meaning and
Montague Grammar*. Reidel.
- Green, G. M. 1974. *Semantics and Syntactic
Regularity*. Indiana University Press.
- Gropen, J., S. Pinker, M. Hollander, R. Goldberg
and R. Wilson. 1989. "The Learnability and
Aquisition of the Dative Alternation in
English," *Language* 65, 203-257.
- Jackendoff, Ray S. 1983. *Semantics and
Cognition*. The MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*.
The MIT Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』. くろしお出版.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研
究』15. (金田一(編). 1976. 『日本語動詞の
アスペクト』むぎ書房に再録)
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and
Alternations: A Preliminary Investigation*.
The University of Chicago Press.
- 文部科学省. 2008. 『中学校学習指導要領解説—外
国語編』.
- 小野尚之. 2005. 『生成語彙意味論』. くろしお出版.
- Pinker, Steven. 1989. *Lernability and
Cognition: The Acquisition of Argument
Sytructure*. The MIT Press.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative
Lexicon*. The MIT Press.
- 白井恭弘. 2004 『外国語学習に成功する人、しない
人』. 岩波書店.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*.
Cornell University Press.